とおるのトーク

新型コロナの流行はこのコラムが出るころは、どうなっているんだろうか？

３月、ぼくは季節性インフルエンザと同じだろうと軽く思っていたのに、医療崩壊が危惧される中で、４月、緊急事態宣言が全国に…。ニュースもその話で一日が過ぎた。長く生きてきたがこれほど世界的な騒動は初めてだなぁ、この先どうなるのか大いに気にはなる。と、考えながらひと月。

５月、リハビリ以外は外出も自粛していた連休も過ぎて、マスク美人が一気に増えたさなか、宣言解除の動きもある。どうせ経済優先の官邸指示じゃないの？せっかく感染も落ちつきつつあるのに解除後に即再宣言されてもねぇ。

自粛って文字通り人に指図されてやるものではない。ぼくも医療の現場で命がけで戦う人達の映像や話を聞いたことでなるべく自宅に籠ることにした。

医療や介護の現場は本当によくやってくれている。ヘルパーの中には手洗いしすぎでスマホの指紋認証も出来ない人も、暑くてマスクを外したいと嘆く声も聞く。これからが暑さ本番、１日も早くマスク無しの日常を取り戻したいものだ。

遡って、１月に政権に甘いとされる黒川弘務・東京高検検事長の定年延長を閣議決定したが、法解釈を変更し定年延長を可能にしたなどと言い出して批判を浴びていた。もり・かけ・さくらと疑惑ずくめの内閣には検察トップの検事総長に黒川弘務を就任させたいわけだ。５月、ここにきて検察庁法改正案の審議が衆院で始まっている。検察官の定年を引き上げるとともに、内閣や法相の判断で定年を延長できる規定が新たに盛り込まれた。コロナを隠れ蓑にして三権分立が脅かされているよ。

文：静岡障害者自立生活センター　橋本とおる

ヘルパー募集中！

ヘルパーとして一緒に働きませんか？
資格がなくても、働けます。W ワークもOK。お気軽にお問合わせください。

Tel.054-288-6068 担当：奥村・宋

【編集後記】今年度は、「広報誌にもっと愛着を持ってもらえたら」という思いのもと、広報委員会で機関誌名をつけようという話し合いが持たれた。事業団全職員投票により「ひまわり通信」と名付けられ、各委員、面白い内容になるように早速取材調整を行っていたが、昨年末からジワジワと感染拡大をしていた新型コロナウィルスは日本全国でも猛威を振るい、当団体も緊急事態宣言以降は規模を縮小しての活動を余儀なくされた。3密を避け、皆マスクを着用してソーシャルディスタンス、手洗いウガイに手指消毒…何とか取材することはできたものの、違った意味で今までにない取材風景となった。この機関誌が皆さんの手元に届く頃には、せめてマスクが外せて笑顔が見られるようになっていることを願う。　広報委員：真田妥世子

スープ屋 Hygge　誰もが気軽に集まれるお店。今回は、当団体の「就労継続支援Ｂ型それいゆ」と親交のある「スープ屋 Hugge（ヒュゲ）」さんへ利用者さんと一緒にお店を訪問させていただきました。

ひまわり通信

Vol.1 2020.6.

どんなに重い障害があっても 地域で共に生きる社会”を目指して

発行：特定非営利活動法人 ひまわり事業団
静岡障害者自立生活センター

〒422-8006 静岡市駿河区曲金 5-4-58
TEL：054-288-6068　FAX：054-287-4922
E-mail：himawari@scil.jp　HP：https://www.scil.jp

編集：ひまわり事業団　広報委員会

スープ屋「Hygge」　人と人とが出会ってつくる幸せな時間

焼津市内の住宅街にある自宅兼店舗。玄関まではスロープがあり、玄関引き戸を開けると正面には土間のような広い空間がアートギャラリーになっており、縁のある人の作品を展示。右手に「スープ屋」スペースがあり、バリアフリーで造られた何とも居心地のいい空間がある。

「お客さんは来店すると 2～3時間過ごすのよ。」と、店主の吉田さん。

お店を始めるきっかけは？

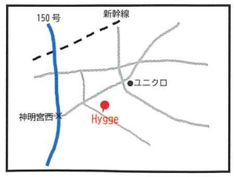
35 才の頃から 60 才になったら「多様な人々が集まれる場所」をつくりたいと考えていた。食べることが好きで、何か魅力的なもの＝食べること。「スープ屋」に決めたのは著書：辰巳芳子さんの「いのちのスープ」に感銘を受けたから。赤ちゃんからお年寄りまで、病気のある人にも食べ易くて、心にも体にも優しい食事だから。素材もオーガニックにこだわり、お値段も優しい。

多様な人が集まる場所だから、「スープ屋」以外にも「おうちでパン教室」や「哲学カフェ」といったワークショップやミーティングの場としての提供も積極的に行い、そこに集まる人が繋がり交流の場となっている。

この先のことも考えていますか？

今は完璧でないけれど、充実した日々を過ごしている。この先は 75 才。何か女性を応援できる事をしたい。シェアハウスとか、仕事で忙しいシングルマザーの代わりに子供達に食事を作ってあげるとか・・・何となく思い描く感じ。60 才で「スープ屋」を始めて軌道に乗るまで３年程、そう考えると時間は 10 年程、健康で赤字でなければ。（笑）

スープ屋「Hygge」店の様子



営業日：水・木・金・土曜日
11 時～19 時（17 時以降は要予約）、不定休。
焼津市西小川 5 丁目 20-10
tel.054-628-9846　駐車場あり

快く訪問を受け入れてくれた店主、吉田恵美子さん（右から２番目）。訪問に同行してくれた、ひまわり事業団「就労継続支援Ｂ型 それいゆ」の鵜沢大地さん（右）、長谷川亜紀さん（真中）、細沢奈奈さん（左から２番目）、「生活介護 それいゆ」の増井比加るさん（左）。

【種】を探すきっかけになれば

私の友達が、こんな話をしてくれたことがあった。「誰もが自分の中に【種】はあるけど、まだ探し出せていないだけ。誰もが、自分や他人、地域の人へ、何かやりたい、したいという【種】（思い）を持っているけど探し出せていない。」と。

だから、私は、ここにいろいろな人が集まって他愛もない話をしていくことで、何か【種】を見つけるきっかけになればと思っている。

対話することの大切さ、人との繋がりの大切さを優しく力強く話してくれたことが印象的だった。

撮影：鈴木梨可　文：真田妥世子

店主：吉田恵美子さん（よしだ　えみこ）
特別支援学校を中心に 35 年間教職を務めた後、デンマークの障がい者と健常者が一緒に学ぶ成人学校「エグモントホイスコーレ」に留学。現在、静岡県焼津市在住。スープ屋「まちづくりを考える会 hygge」代表、「アートクラブ waC」スタッフ、「市民活動交流センターくるさ～」相談員、「人間と性教育研究会」会員、NPO 法人「静岡県障害児養育の充実を考える会」理事。
性教育を学ぶことで自分に素直になれ、福祉の勉強でデンマーク留学を決意。

グループホーム　な～ら

コロナウィルスに負けないぞ！

４月はお花見、な～ら６周年記念の食事会。５月はＳさんのお誕生日会にカラオケを予定していましたが、コロナウィルス感染拡大の影響で行事が中止・延期となりました。

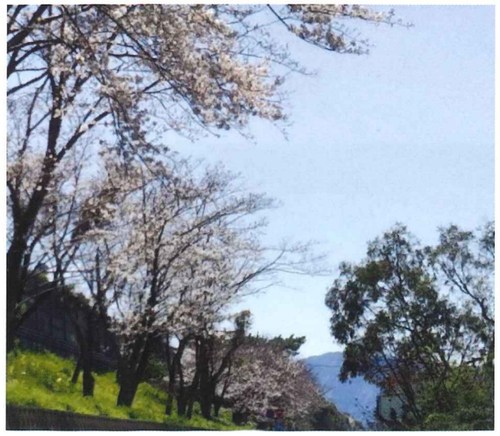
←意外と難しいボール運動。

４月 20 日からは通所の仕事もお休みとなり、グループホーム内での食事も各部屋で摂る等、住人のほとんどが外出の自粛を余儀なくされ、外出したい気持ちでうずうずしていました。そこで、何をして過ごすか皆で相談し、「午前中はグループホーム駐車場でソーシャルディスタンスに配慮して体操、散歩。午後はボールを使った運動や遠出の散歩と体を使いまくる！！」と、決めました。散歩の途中で見上げた桜は例年と違う花見となりましたが、皆の笑顔が見られました。また、土・日曜日は海まで歩き、風を感じて大満足でした。静岡市の名所、登呂遺跡や護国神社も散歩コースに取り入れ、散歩が飽きないよう工夫をしていました。それでも、「仕事に行きたいな。仕事したいな。」という気持ちも強く、事業所の方に内職を提供してもらい、部屋を少し片づけて仕事ができる環境をつくり、内職作業に励む時間も作りました。皆で、「もう少し、もう少し」と、励まし合いながら自粛生活を過ごしています。

この機関誌が出来る頃には、な～らの食堂がいつもの賑わいを取り戻せていることを願います。

文：清水かおり

散歩風景。
縦一列を心掛けて歩き、東名高速道路近くの桜並木付近を散歩。
静岡護国神社（一番右の写真）まで散歩。鯉のぼりがありました。



放課後等デイサービス　らるく

この3月、4名の子供達がらるくを巣立っていきました。10 年ほど、当団体と関りがありましたが、みんな、それぞれ新しい道へ進み、卒業となりました。

３月には、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、突然の学校休校・・・・
卒業生を送る会や卒業式、修了式やお世話になった先生方との離任式など、規模を縮小したり、中止になってしまったりと例年にない年度終わりとなってしまいました。

らるくでは、長期休みと同様に朝からの受け入れを開始し、健康観察など、おうちの方との協力のもと開所しました。

緊急事態宣言が発令されると、らるくのお隣さんの生活介護や就労Ｂ型が閉所になり、普段の賑やかな声がない中、らるくは時間短縮をさせて頂き開所しています。

ご家庭の判断で自粛をされている方もいらっしゃいますが、らるくを利用して下さる利用者さんと、職員も体調には十分に注意しながら創作活動や近隣を散歩して過ごしています。

文：芝野琴奈

らるくから卒業証書をお渡ししました☺

セッション中♪♫

散歩に行く時はいつもこのスタイルで😎

・ひまわり事業団を支える人　その１　・

増本（ますもと） 雅敏（まさとし）　さん

昭和２８年、静岡で生まれ、富士見小学校、高松中学、静岡東高を順番に卒業して、高校卒業まで静岡（登呂、石田、見瀬）に。そのあと東京（参宮橋、茗荷谷、板橋区大山）で７年くらい過ごし、また静岡に戻ってきました。

ひまわり事業団の「相談処」増本弁護士にお話を伺いました。

どんな学生時代でしたか？

東京では、大学の前半は、ぼんやり過ごしていて、後半は司法試験の勉強です。下宿には、冷蔵庫がない、テレビがない、電話がない、エアコンがない。トイレは共同、食事は近所の食堂、風呂は銭湯です。カセットデッキが一台ありました。荒井由実の飛行機雲なんかが流れていたように思います。町の食堂で、夕飯に冷や奴を食べていると、ラジオから田中角栄逮捕のニュースが流れてきました。へぇ、総理大臣が逮捕されるんだと驚いたことを覚えています。昭和４７年から５４年くらいのことです。

弁護士にはいつなりましたか？

２８歳で弁護士になりました。

静岡で弁護士の仕事を始めましたが、最初は何も解りません。大先輩弁護士の事務所に居候させてもらい、給料をいただきながらオンザジョブトレイニングを３年しました。このころ安倍川製紙労働組合の事件（会社が第２組合を作って、それまであった組合を分裂させて、組合をつぶそうとした）や浜松市の過労死事件（清掃作業に従事していた人の突然死）などを弁護団に混ぜてもらいながら、やっていました。

どのような仕事に携わってきましたか？

独立して、横内町に小さな事務所を出してからは、国鉄の分割民営化を巡る国鉄労働組合の事件、下田ドック倒産事件、森町カントリー倶楽部の事件、吉田高校の英語の先生の過労死事件、いろいろとチームを組んでやっていました。勝ったり、負けたり、笑ったり、泣いたり、上手くいくときもあれば、思うようにならないときもあります。そんなこんなで今に至っています。今年６６歳になります。ずいぶん長いこと弁護士として働いてきました。少しくたびれてきています。

ひまわり事業団とのつながりは？

ひまわり事業団とは、静岡商工会の丸林さんの紹介でおつきあいするようになりました。理事会に参加して、意見を求められればお話をするようにしています。理事会での報告や議論を聞いていると、沢山のいろんなことを頑張ってやっているなあと感心します。自分たちのことですから、より真剣に、まじめにまっすぐ取り組んでいるのだなと感じます。

趣味や好きなことはありますか？

趣味は特にありません。前には浜で投げ釣りをしたり、御前崎から船を出してもらってイサキやアジを釣りに行くことがありましたが、もう行っていません。黄金崎や宇久須の海岸でキャンプをすることもありました。魚をさばくことは出来ます。砥石で包丁も研ぎます。今はしていません。大きなバイクに乗りたくて中型の免許を取り、ホンダのクラブマンと言う２５０ｃｃのバイクに乗っていたことがあります。が、そこ止まりで、それ以上大きなものには乗らず仕舞いです。今は自転車で移動しています。飲んで歌うことはしますが、だいぶパワーが落ちてきました。下り坂です。そういえば何年も前から、家にTVがありません。壊れて直さないでいたらそのままになってしまいました。新聞も取っていません。ニュースはスマホやパソコンで見ますし、週刊誌を読みます。週刊朝日、文春、新潮、ポスト、現代、エコノミスト、まあ同じような記事ばかりで、たいしたことはありません。

人の好き嫌いは無いですが、安倍首相はダメです。やることなすことでたらめです。国民の生活をきっちり守ると言う政治家の基本が出来ていないからです。

自分で必死に考えて、誠実に決める、そして精一杯頑張るという、生きて行くときの基本が出来ていないからです。こんな人が首相をやっているなんて、情けないです。

最後に何かメッセージを！

皆さんにお願いがあります。「世の中を変えていこう、自分が、世の中を変えていこう」と言う強い意志を持って欲しい、その気持ちを持ち続けていて欲しいと言うことです。おかしなこと、理不尽なこと、嫌なことがあったときに、流されるのではなくて、人に頼るのではなくて、「自分が変える」という意思を持って、立ち向かっていって欲しいと言うことです。そんなに簡単には、世の中を変えられませんが、正しいと思うことは声を大きくして発言してください。あなたが発信することを、仲間が聞いていますし、聞いた人が新しい仲間になります。何も言わないと聞かれないで終わってしまいます。

わたしは、少しくたびれていますが、皆さんと一緒に前を向いて、もうしばらくは歩いて行きたいと思っています。　よろしくどうぞ。

相模原障害者施設殺傷事件、発生からもうすぐ４年経過。死刑判決確定で、事件は終了か？

～　社会福祉の観点から残る課題　～

2016 年 7 月 26 日、神奈川県立の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」にて元施設職員の植松聖が施設に侵入して所持していた刃物で入所者 19 人を刺殺し、入所者・職員計 26 人に重軽傷を負わせた。2020 年 3 月に横浜地方裁判所における裁判員裁判で死刑判決を言い渡され、自ら控訴を取り下げたことで死刑が確定している。

この事件について、テレビ、新聞等で意見を述べ、実際に植松死刑囚と留置所にて接見、面会、文通を複数回重ねた佐々木隆志教授（静岡県立大学短期大学部　社会福祉学）にインタビューしました。

まず、どういった経緯・気持ちでコンタクトを取ろうと思ったのでしょう？

（佐々木教授）
理由は３点ある。

① 植松死刑囚が元施設職員であったこと。やはり同じような加害者を出してはいけないということが大きい。
② 事件は障害をもつ人にとって非常に悲しいもの。障害者は生きていることが不幸とし、世界平和のために麻薬の開放と障害者を自然に戻すと話しており、それはとんでもない話。私の家族を含めてそれは、障害を持つ人に大きな恐怖を与え、おびえさせるものであった。
③ ノーマライゼーションということを考えた時、あの事件は社会が生み出した悲劇。

本来は社会全体が、植松に立ち向かっていかなければならないはずだが、やはりあの事件以降、驚くべきことに静岡県内含めて「施設を襲うとか模倣犯が増えたのも事実。ほとんどの報道が「植松」にフォーカスされ、障害者施設がどういった状況であるのかが抜けている。それは悲しい現実。

植松は元々障害者を殺したいと思っていない。世界平和実現のその手段として一番やりやすい方法を選んだ。それは自分の口で言っている。１人、２人殺しただけでは目立たないと大量殺人を計画した。

彼は障害者が生きていることは不幸だとし、土に帰すと話している。立川の拘置所であったときに、「父親が寝たきりの認知症になり、徘徊する状態になったときに、すぐにあなたのいうデリートをするのか」と聞くと、彼は下を向いた。それがすごく印象的。

この事件は現代社会が出した悲劇。植松のような人を作ってしまったという見方もある。

もう１つ印象的なのは、2018 年に起きた新潟女児殺人事件について「どう思うか」と問うと、彼は「悔しい。幼い命を奪い、絶対に許せない」言っている。植松に、「君は 1 クラス以上の人達を殺している」と言えば、「それは全然意味が違う」と。「そこには完全に線が引ける」と。本人なりに決めた線が引けるとはっきり答えている。

我々、福祉関係者は、ノーマライゼーションの知識、技術と言っているが、じゃあ日本社会福祉学会、介護福祉学会、精神保健学会等が声明を出したかというと出していない。だからやはりあの事件は、日本の社会福祉史に残るすごい事件だと思う。我々の中でも、『障害』ということで自動的に、無意識の中で線を引き、差別がある。

事件ということと、社会福祉の問題と切り離して考える必要がある。

今回の接見から始まって、世の中に訴えていることの最終的なゴールとは？

ノーマライゼーションの具現化・インクルーシブな社会、差別のない社会。

ちょうど 2 年ほど前に、障害者雇用の水増し問題があった。障害者はあるときは、利用されている。ある時は数合わせにし、あるときは街で差別を受ける。そして植松のように、あるときは不要と言われ。障害のある人もない人もインクルーシブな社会の実現というのが、国で示している共生社会。そのためにはやはり教育がある。しかし、教育委員会など、障害者雇用率が法定に達していないのも現実。

今回、新型コロナウイルスの流行で流れていることもあるが、判決が出たことに対しての世の中の興味、関心が非常に薄いのでは？

福祉のこと、生活困窮のこと、とりあえず自分の問題で精いっぱいというのが世の中の本音。リストラ、賃金カットなど、そこまでの余力がない。なぜ自分がこんなに一生懸命なのかと記者に問われたことがあったが、引っ張れる人が引っ張らないと。私が何も言わなかったら、この事件はこんなに大きくならなかったかもしれない。ただ死刑になり、謎だらけな感じがする。

死刑判決が出たが、自分の中では研究の一環でやっていて通過点でしかないと思っている。社会が知りたいのは、「なぜ植松がそこに走ったのか」それはこれまでの資料から解明していく責任がある。そうでないと遺族の人はたまらないと思う。何も意味なく偶然そこに寝ていただけで、殺されたとすれば、植松を何回死刑にしても足りないくらい悔しい。３年間の中で、精神鑑定を行ったが、何も見えていない。何もわからなかった裁判だった。しかし、本人は控訴しないと言っており、判断能力が自分はあると言っている。

<プロフィル>
佐々木　隆志（ささき　たかし）
静岡県立大学　短期大学部社会福祉学科　教授
専門分野：社会福祉、老人福祉
自身の三男が広汎性発達障害を持っており、障害者の親としても、事件に強い違和感を感じている。

彼が精神病者、異常者であれば落ち着きが良いと思っているのでは？

確かに、疑いの要素はある。しかし、精神疾患であるという言葉を使ってしまうと、実際に精神疾患を持つ人は街を歩けなくなってしまう。私もある講演で「障害の疑いがある」と話したら、抗議はすごく「その言葉は絶対使わない方が良い」と言われた。それよくもわかる。

しかし、まともな考えでは、あんなことできない。ああいう凶悪事件を起こしているということは、どこか異常。だから措置入院している。

本当は３年間の間に発達検査、知的、精神の検査などしっかり行えれば、何らかの障害という区分に入るかもしれないが、逆にそれは遺族にとってみればたまらない。怒りを感じると思う。どっちに転んでも問題が大きい。判断能力がなく、無期懲役となり、「まだ生きている」と思えば、あの殺人は何なのか、それが理由で何でもできると思われてしまう。すごく難しい。

犯行、思想の直接な原因が彼の中にあったというより、世の中の風潮など凝縮したものが彼の犯行動機なのでは？

被告の本の企画があった時、静岡新聞１面でも大きく取り上げられ、議論を呼んだ。その時、事件に怯えている多くの方々がいるなかで、何故、その犠牲の上に刊行するのかを編集者に訴えた。本が出るときに「殺人者の誤った考えを出す必要があるのか」という声があった。しかし、表現の自由を奪っているという見方もある。どちらにしても本の出版は本人にとっては『評価されている』こと。事件直後に学生が慌てて、植松の事件以上に「フォローする」「よくやった」「もっとやれ」という意見がネット上にあった。

彼は「自分には支持者がいる」という言い方をしている。現実的にそういうことを匿名の世界で発言し、そういう人達が社会の空気を作っているとすれば、そこが問題

彼の単純な動機は「目立ちたかった。」話している内容の過激さから「こんなやつと付き合いたくない」と周囲の人間が離れ、どんどん目立つこと、注目を集める行動に走っている。

実行させた理由は複合的。もしかすると福祉に対してのいら立ちもあったのかもしれない。社会福祉の仕事は特殊的で、利用者はごはんを食べない、言うことを聞かない人もいて、ケアの仕方も十人十色。しかし、時間は決まっていて、ルーティーンに乗せなくてはいけないために力ずくに引っ張ることもあった。それを他の職員から注意されること、過激な発言で職員間のトラブルもあった。そのあたりからＳＯＳが出ている。

２月くらいに国会に「これから障害者を全員殺しにいく」と手紙を持っていっている。そこで門前払いに合い、どんどん炎上している。「絶対にやってやる。今に見てろ」と。何が何でもそうしたいと思ってしまったところがあるのではないか。

※取材日：
2020年３月14日
新型コロナウイルス感染予防のためにマスクを着用しての取材、撮影となっております。

現実を見ること、知ること、関わることなくして福祉、教育はない。

インクルーシブな社会を目指すために何が必要でしょう？

障害を理解するということは、生活の中で触れること、関わることなくして理解はない。当事者の話を聞いたり、ボランティアをしたり、生活の中で知ること。そして、小中学校で特別学級との交流、地域との交流が必要となる。

全国の障害者支援施設 700 ヵ所以上にアンケートを実施。今回の事件を受けての施設の対策としては、フェンスやカメラ設置など、塀を作ることに走っている。このままでは障害者施設が、高い塀の中で、刑務所のように何をしているかわからないという昔の状況に戻ってしまう。

鍵屋、警備会社などの民間ビジネス、防犯用品などの需要がものすごく増えている。居室にカメラを入れた施設も増えた。これは人権問題にもつながる。

厚生労働大臣の要望書には、「ハード面では子どもたちの命は守られない。」と訴えた。地域の中で守っていくというスタンス。塀がなくとも、地域の中で溶け込み、防止できることはたくさんある。そういう社会を国で示していかなければいけない。

塀の建設に６００、７００万というお金の補助をし、国で６億、７億のお金をかけていることは無駄なお金になっているという見方もある。本来がかけるべきお金は、職員研修や交流事業だと考える。

要望書の内容について少し教えてください

この緊急要望書は、静岡市の手をつなぐ育成会の会長とともに、厚生労働大臣にアポを取り、提出した。

＜緊急要望書＞

- **福祉施設職員の処遇改善**
  初めから植松みたいな思想の人を採用したのか、採用後にそういう思想になったのかという見方もあり、どちらも関連している。職員の質と高い給与はリンクしており、質の高い職員を求める場合は、高い給与が必要

- **配置基準**
  多くのケアが必要となる重症心身障害児の生活介護利用時に職員配置を厚くする

- **地域との交流事業への予算付**
  →これは部分的に採用された
  この要望書の意味は大きいと考えている。福祉サービス労働者はぎりぎりで生活しているため、何かあればバーンアウトしてしまう。労働環境を改善しない限り、質の高いサービスは難しいと考えている。世の中的に、コロナ流行に伴い報道されず、沈静化され、消えてしまっている。本当はこれからであるはず。こういうことを取り上げることが大事だと感じている。

取材を終えて

当団体は障害当事者団体の、障害福祉サービス事業所として、日々障害を持つ方、その家族、関係者と関わり、「支援」を行っている。

「地域で生きる」ということはどういうことなのだろうか。住所、居住地の問題なのか。

「生活」を支える福祉従事者が大切にすることは何だろうか。「当事者主体」「効率性」「ルール・時間」、それらを織り交ぜ、場面毎の判断を迫られる福祉従事者にどんな支援が必要なのだろうか。植松死刑囚も同じ「福祉従事者」であった。

今からできることは何だろうか。大きな宿題を得たと同時に佐々木先生のように、今回の事件を機に、福祉の現場で働く者に思いを寄せ、そこへの支援の必要性を訴えてくれる人がいることに強い感銘を受け、心強く感じた。

（対談：劉　瑛哲　　文：宋　裕子）

ヘルパー＆利用者 対談連載 ver.8

SUPPORTER × SUPPORTER

サポーター×サポーター

私たちには、
介助する側とされる側以上の関係がある！

Person introduction

ヘルパー 池田（いけだ） 敏彦（としひこ）さん

誕生日 1月11日　血液型 A型
趣味 スポーツ(ソフトボール歴15年)
将棋・碁(学生時代から 約40年)
性格 温厚。怒ることはほとんどない！！(本人曰く)
短所は、自分ではわからない！！

利用者 花井（はないい） 大輔（だいすけ）さん

誕生日 2月7日　血液型 B型
趣味 スポーツ観戦・アイドル写真集収集(現在10冊以上)現在は、上白石姉妹に夢中！！
性格 明朗活発であるが、落着きがないところあり。
KY笑顔が魅力的

ひまわり事業団との関りはいつから？

花 僕には、先天性多発性関節拘縮症という難病があり、四肢に麻痺がある。特別支援学校に通い、卒業してから、就労継続支援B型の事業所を何か所か利用して、4～5年前から生活介護それいゆを利用。当時は、利用者が多く、知り合いばかりで和気あいあいとしていた。ひまわり事業団のヘルパーさん達とは、高校生の頃からの付き合いだから10年以上。池田さんとは、意外と最近の関わりでここ数年前の付き合い。

池 今から20年前に糖尿病になり身体の大切さ痛感しました。この経験を踏まえ、人のために何かしなければいけないと考え、ヘルパーの仕事を始めました。このヘルパーの仕事は自分にとっては、天職だと思っています。

お互いの第一印象は？

花 池田さんの第一印象は、「優しくて、明るい。」
笑顔が素敵な人だと思いました。

池 花井さんは、「とにかく明るい、無条件で明るい！！」
それから、余り物事を深く考えていないと思いました。(笑)

お二人で最初に出掛けた所や、思い出深い体験を教えてください。

花&池 最初の外出は、プロ野球オープン戦を観戦しましたが、他の利用者さんたちも一緒に観戦していたので、はっきり覚えていないのが、現状です。だからこそ、今度、二人の都合が付けば島巡り（日本国内）に行きたいと考えています。

思い出深いことは、3年程前に地域の運動会に参加して一緒に玉入れと綱引きをやったこと。花井君は社交的なので地域の人達に好かれて楽しくやれました。

これから一緒に一番やってみたい事、行きたいところはありますか？

花 旅行です。家族旅行が多いので、ヘルパーさんと行ってみたいです。
北海道には行った事がないので行ってみたいし、海鮮丼を食べてみたいです。

池 沖縄に行きたい。年に2回は行きたい。でも今は年に1回。
特に今年は新型コロナの関係で行けていないので、終息したら是非行きたい。沖縄の国際通りで買い物して、ステーキ屋さんがあるから花井君に食べさせたい。

花井さんは現在1人暮らしをしていますが、普段どのようにヘルパーさんを使っているのか教えてください。

6時半　起床
大体5時に来たヘルパーさんにご飯を温めてもらって、料理を写真に撮ってもらう。体重管理をしているので、記録を残している。そして、朝食を摂り、出かける支度。

9時　生活介護へ出発
ヘルパーさんに見送ってもらい、1人で出かける。

10時～15時　生活介護

15時～17時　リハビリ・買い物・通院等
ヘルパーさんと合流して外出。ここから就寝までヘルパーさんを使う。週2～3回程、泊りで入ってもらうこともある。

17時～18時　帰宅

19時～　夕食

21時～　入浴

22時　就寝

サッカー日本代表戦がある時は遅くまで起きて見ています☻

花 2016年に、車椅子使用者向け市営住宅の抽選に申し込んで、1回目で当選したので「もうやるしかない！」と思って、その年の11月21日から一人暮らしを始めて今年で4年目。
生活介護にいる時間以外は大体ヘルパーさんを使って生活している。

←朝の通勤風景。雨の日もレインコートを着て1人で出かける。

最後に、お互いへ一言。

身体を大切にしてください！！
そして、ヘルパーに入る回数がもっと増えたら最高です。そのためにも、
くれぐれも、お身体気に付けてください！！よろしくお願いします。

体重が増え続けているので、食生活等、日々の生活に気を付けてほしい、口うるさい人が一人ぐらいいても良いと考えます、私がその一人になりますから！！
これからも、元気で明るい花井さんをサポートしていきます。
これからもよろしくお願いします。

お二人から、この機関誌を読まれている皆様へ。

皆さん、コロナ等に負けぬよう、頑張りましょう！！明けぬ夜は無い！！

今回は、限られた時間と環境の中で、この取材にご協力いただき、誠に有難うございました。
制限のある取材の中でも、お二人の個性、関係性、環境の良さを感じることが出来ました。今回の新型コロナウィルス感染のことがなければ、もっとじっくりとお話を伺いたかったです。
個性のあるお二人に対して感謝の意味を込めて、最後にある映画監督の言葉を贈りたいと思います。
個性とは、元々、傷なの欠点なの！！それが誇りをもったなら、初めて個性になる！！

撮影・取材・文：遠藤和徳

気になるキーワード

１人暮らし

花井さん、一人暮らしを始めたきっかけ教えてください。

将来、家族が居なくなった時に一人でも生きていけるよう、家族が元気でいるうちに１人で暮らしを始めたかった。中学生の時からそう思っていたし、自立生活していた先輩に憧れもあったから。それで、生活介護それいゆに通って、自立生活に向けて ILP をやりながら準備を進めていった。ILP では、※自立体験ハウス「ビギン」を利用して、料理体験、買い物体験等、ヘルパーさんに一人暮らしに必要な指示を出せるスキルを身に着けていった。あと、市営住宅の抽選に１回目で当選したこともあり、予定より早く一人暮らしを始めることになったけど、今年で早４年目。将来的には、ひまわり事業団の職員になって働きたい。その為にも各種研修や勉強会に積極的に参加してスキルを磨きたい。

※自立体験ハウス「ビギン」とは、静岡障害者自立生活センター独自の事業で、将来自立を目指す障害者がバリアフリー設計ではない、ごく普通の民間アパートでヘルパーを使いながら一人暮らし体験ができる施設。その他、レスパイト等の多岐に活用できる。

取材・文：比嘉靖知

イギリスで障害者と共同生活（2）シベリア鉄道に乗り込む

「施設生活＝ツアー旅行」であるとしたら、「自立生活＝インディー旅」です。
自立生活を目指すアナタは、もちろん旅もインディーで行きましょう！

障害者と健常者が共同で生活する「キャンプヒル共同体」から「ボランティア受入れOK！」の手紙が届き、いよいよOKUは仕事を辞め、住んでいたアパートも引き払い、イギリスへと旅立つことになりました。しかし、ここでOKUは「自分が英語を話せない…」という厳粛な事実にハタと気付いたのです（今さら遅いって！）「ヤバイ！このままではボランティアするどころか、される側になっちゃう！」。そこで、OKUが選んだのは、ボランティアする前に「2か月ほどホームステイしながら英会話スクールに通ってみっちり勉強する」という手段でした。しかも何故かイギリスではなく、お隣のアイルランドで。おそらくイギリスよりアイルランドの方が物価が安いだろう…というのがその理由です。こうして急きょ予定変更、最初の目的地はアイルランドとなったわけですが、ここでまた、いつものヘンな欲がムクムクと湧き上がってきました。「どうせいつ日本に戻るかわからない片道切符の旅なら、いっそのこと飛行機なんか使わないで、陸路でヨーロッパを目指しちゃおう…」「シベリア鉄道に乗って、ユーラシア大陸を東から西へと大横断し、地球の大きさを体感するんだ！それが男のロマンなのだ！」OKUはこのように、突如として鼻息荒く意気込んだのです。

それから約3か月後、日本海で船に揺られているOKUの姿がありました。ロシアのハバロフスクからシベリア鉄道に乗るべく、横浜からナホトカへと向かう船に乗ったのです。船の最後部のデッキチェアに身を横たえ、泡立つ航跡を眺めながら、OKUは、前の日に横浜の大桟橋で、親戚のおばとの間に交わされた感動的な「別れのシーン」を思い起こしていました。色とりどりの紙テープが舞う中、船がゆっくりと港を離れ始めた時、おばがこう叫んだのです。
「しっかり国際交流しておいで～！」
それは、すぐに、別れを惜しんで桟橋に押し寄せた多くの人々の歓声にかき消されました。
やっぱ船旅を選んで良かった。ヒコーキじゃあ、こうは行かないもんね。
「それにしても、この先いったいどうなっちゃうんだろう…グスン（泣）」
横浜からロシアまでは２泊３日の船旅でした。早くもホームシックに襲われながらも、いよいよOKUは、シベリア鉄道に乗り込むことになりました。

ところで、シベリア鉄道と言えば、総距離 9000 キロにおよぶ「世界最長列車」です。終点のモスクワまでなんと７日間かけて、広大なロシアの大地を駆け抜けるのです。さてさて、どうなることやら…　　続く。　　文：OKU